

あれから5年、ようやく5年

「逃げて、危ない」壁のタイルが剥がれ床に落ちてきた。周りを見渡すと歩けなくなりしゃがみ込んだ患者さんを見つけた。声をかけ外まで運び出した。外来や待合室にいた患者さんが外に出たのを確認し、私はまだ揺れる病院へと走った。トイレの中、検査室、レントゲン室、すべてのドアを開け、中に人がいないか確認した後、入院患者さんがいる病棟へと走った。2階は人が足りているようで、3階へと向かった。向かう途中、窓から工場が倒壊するのが見えた。3階へ向かうと変な音に気付いた。すると階段から滝のように水が流れてきた。どうやら屋上にある貯水タンクが破裂したようだった。元々2つあった階段だが貯水タンクが破裂したことにより、1つしか使えなくなってしまった。事務室に戻り屋外の非常階段の鍵を掴み開けると、混雑していた階段がようやくスムーズに流れだした。その間にも余震は幾度となく襲い掛かった。病室を開けると泣き叫び震える付き添いの人がいた。患者さんを抱え、付き添いの人と共に避難した。無事に全員を外に避難させ、人数を確認した。次に入院患者さんの受け入れ先を探した。保健所と消防署が受け入れてくれることになったが、道路は大渋滞。病衣1枚だけしか身に着けていない患者さんの身体を毛布でさすり続けた。その待ち時間が患者さんの体力を奪い、私たちも寒さ、そして恐怖が増した。

次から次へと負傷した患者さんがやってくる外来。自分の子供の安否すら確認が取れず、「連絡が来たら教えてほしい」とだけ私に告げ、気を引き締めた表情で現場へと戻っていった看護師がいた。数時間後、大きなランドセルを背負った男の子が病院にきた。その姿をみた看護師が一瞬母親の顔に戻り、一粒の涙を流しながらその子を力強く抱きしめた。小学校から病院まで約8kmにも及ぶ、灯り一つない道のりを自力で歩いてきたようだった。「もう少し待っててね。ママを待ってる人がたくさんいるからね。」と男の子に告げると、涙を拭った。その瞬間に今度は看護師の顔に戻り、駆け足で現場へと戻っていった。

医療事務員であった私は、看護師という職を身近で観てきたつもりでいた。その職種は「患者を診る」ことだと重々分かっていた。しかし、「看護師」という仕事、「患者を診る」という業務の重さをこれほどまで痛感したことはなかった。そして、何より自分の無力さを知った。あの日は、被災者として忘れてはならない日。そして、心から「人を助けたい」と切に願った忘れられない日となった。あれから5年。私はようやく看護学生として患者さんを受け持たせていただけるようになった。いつになったらなれるのでしょうか。あの時見た看護師の顔に。「あなたを超えてみせます」遠く離れたあなたに届くように誓います。